

### 第32期第1回小田原市図書館協議会会議録

- 1 日 時 平成28年10月27日（木） 午後1時55分～午後4時20分
- 2 場 所 小田原市立かもめ図書館 集会室（2階）
- 3 出席者 宮崎委員長、松下委員、大塚委員、益田委員、松本委員、  
勝又委員、深田委員  
関野文化部長、杉崎文化部副部長、古矢図書館長、三樹副館長、  
杉崎副館長、内田管理係長、野村サービス係長、小野サービス係長、  
遠藤サービス係長、星崎主査
- 4 傍聴者 0人
- 5 内 容
  - (1) 任命式  
関野部長より各委員へ任命状を交付（介添え 内田管理係長）
  - (2) あいさつ  
関野部長からあいさつ
  - (3) 委員自己紹介  
「資料1」の名簿順に自己紹介を行った。
  - (4) 事務局自己紹介  
「資料2」の名簿順に自己紹介を行った。
  - (5) 正副委員長選出  
館長が仮議長となり、議事を進行した。  
委員の互選により、宮崎委員が委員長に、野口委員が副委員長に選出された。  
  
これ以降の議事進行は、宮崎委員長に交代した。

(6) 報告事項

(委員長) それでは、引き続き、議事を進めていく。

新任委員の方もいるので、図書館協議会の公開・非公開などについて、少しお話しさせていただく。当協議会は原則公開という形で行われ、傍聴希望者がいる場合は、会場に入り傍聴することができるし、配付された資料や会議録については、準備ができ次第、市役所内にある行政情報センターに配架され、だれでも自由に閲覧することができる。

しかし、小田原市情報公開条例で、個人情報や公にできない段階の行政情報など、非公開とすることができる情報を取り扱う場合は、会議を非公開にすることができる。非公開の場合は、傍聴が認められないだけでなく、先ほど申し上げた、行政情報センターで、会議資料や会議録も閲覧できなくなる。また、このような非公開情報を取り扱った場合は、事務局職員だけでなく、我々図書館協議会の委員にも、守秘義務が発生するので、ご注意ください。

事務局に尋ねるが、本日の議題の中で、非公開にする案件はあるか。

(館長) 特にない。

(委員長) ただいま、事務局から、本日の会議においては、すべて公開で開催する旨発言があったが、各委員、何かご意見などあるか。

(各委員から、意見は無く全員賛成)

(委員長) 全員賛成により、本日は、すべて公開とする。現在、傍聴希望者はいるか。

(杉崎副館長) ただいまのところ傍聴希望者はいないが、希望者が来られた場合は、5名まで順次入室いただくので、ご了解いただきたい。

(委員長) 了解。

「6 報告事項 の (1) 平成28年度図書館関連議会報告」と「(2) 図書館行事の結果について(6月～9月)」及び「(3) 平成28年度図書館行事の予定について」は、事務局から、協議事項に多くの時間を割り当てるために説明を割愛する旨、事前に連絡をいただいている。資料については、各委員、すでにお目通しと思うが、質問などあったら、ご発言をお願いしたい。

1) 平成28年度図書館関連議会報告について

「資料3」については、委員からの質問なし。

2) 図書館行事の結果について（6月～9月）

「資料4」について、下記のとおり質疑応答を行った。

(委員長) 9月4日に読書活動推進講演会が行われたが私は参加できなかった。図書館側として課題やよかったことなどあればお話いただけると嬉しい。

(館長) 子ども読書活動推進計画を策定するにあたって、市民の皆さんから意見を引き出すきっかけの意味もあり、講演の後、意見交換を行った。お話もすばらしく、講師が持ちこんだたくさんのお本に触れ、参加者の皆さんが喜んでいました。たくさんのお本に触れる豊かさを、聞きに来た大人もその場で実感できる講演会だった。アンケートの結果も非常に良く、子ども読書に対する皆さんの熱い思いを報告していただいた。こどもがいるお母さん方、図書ボランティアさんなど熱心な方にお越しいただいたが、幅広い層にお越しいただくのは難しいと感じた。

(委員長) 日曜日の午前中というのが出席に影響があったのか。

(館長) どの日時設定にしても都合が悪い方はいらっしゃるようで、図書館行事はいろんな日時でやってみている。そのときどきでいろいろな方が来られるように考えている。

(大塚委員) 7月31日の調べる学習チャレンジ講座について、前回、図書館の本で調べてコンクールを実施すると聞いたが、この講座はどのような形で実施されたのか。

(館長) 明日、調べる学習コンクールの審査会を予定している。初めての企画で、図書館の本を使って調べ物をしてほしい、学習に役立ててほしいという思いから実施したコンクールで、そのコンクールの応募作品をまずこういうものだとすることをわかっていただくためにチャレンジ講座を実施した。初回にしては良く応募していただき、目標の数が集まった。力作があったので、楽しみにしてほしい。今年度だけでなく引き続き実施していきたい。11月23日に表彰式を行うので、その前に新聞等で発表する。

3) 平成28年度図書館行事の予定について

「資料5」について、下記のとおり質疑応答を行った。

(館長) 「11月13日 パパ絵本読み聞かせマスター講座」は、今年度は初めてお父さんを対象とした。「11月6日 小田原文学館特別展にかかる講演会」はまだ定員に余裕があるので、お時間があればお越しいただきたい。

(委員長) 「パパ絵本読み聞かせマスター講座」は学校を通じて周知しているのか。図書館のチラシだけでの周知か。

(小野係長) 図書館だけではなく、小学校にも配布した。幼稚園、保育園も行っているところもある。

(委員長) 難しいが、そういうところにも周知をされると良いと思う。

(大塚委員) 「パパ絵本読み聞かせマスター講座」は定員20人と少ないが、まだ申し込みは大丈夫か。

(小野係長) まだ申し込み可能である。

(7) 協議事項

1) 第2次小田原市子ども読書活動推進計画の策定について

「資料6」に基づき、杉崎副館長が説明を行った。

(委員長) 今年度内にパブコメを実施するのか。本日は、計画案が提示されているのか。

(杉崎副館長) そのとおりである。この案に、パブコメの意見等を反映し、次回の図書館協議会に諮る予定である。

章ごとに説明するので、各章についてご意見をいただきたい。

<第一章>

(松本委員) 乳幼児のいる家庭での読書の状況(3ページ)はショッキングである。図書館と

して前期の取組でどんなところが不足していたのか、分析があればお聞かせ願う。

(館長) 図書館の事業ではないが、ブックスタート事業が廃止になった影響も少なからずあったかと思う。図書館としては、家読への取り組みが不十分であったことや、ダイレクトにお子さんのいる家庭と接触を持ってこなかったところも大きかったかと思う。家庭教育との連携が足りなかったこと、現代の社会情勢の中では何も力を入れていかないとずるずると下がっていく傾向にあるが、それに対して行政として努力が足りなかったということが総括的には言えるのではないか。

(松本委員) アンケートでも「ブックスタートを再開してほしい」という意見があったが、廃止の背景や復活できないのかについて確認したい。また、前期の課題を今期解決するために、抜本の方策というのがあると思うが、どのような方策をとる考えなのかを確認したい。

(館長) 第三次神奈川県子ども読書活動推進計画では全市町村でブックスタートをやることを目標に置いているので、小田原市としても検討の必要はあると考えている。廃止の背景は、子育て政策の一環としてやっていて、ほかの事業の方が子育てに有効であろうとされたこと、一種のばらまきに対する批判、事業仕分けの中で「行政がやらなければいけない事業ではないのではないか」という意見があったこと。こちらは第3章のところでも具体的に議論をしていただけないかと思う。アンケートでもこのところが一番の課題になっているという認識がなされている。

(勝又委員) 私はどちらかというと、ブックスタートは必要なのかという思いもある。家であまり読書をしているわけではないが、改善する方策は必要だと思うので、考えていきたい。

(深田委員) 本を読まない子たちをどうやって引き込むか、それが一番大事だと思う。

(益田委員) 最近、学校司書さんが一生懸命やってくださって、子どもが図書室に来る雰囲気作りもしてくれている。できれば同じ学校に同じ司書が何年かいてくれるシステムが良い。以前、うちの学校では毎年人が替わり、根付かないままいなくなってしまっていた。ここ数年は同じ方で、読み聞かせボランティアとの繋がりもできて図書室自体がいい雰囲気になっているので、すごくいい。6ページに「学校

の団体登録を促進」とあるが、わからないのでご説明願う。

(館長) 「学校の団体登録」とは、資料「用語解説」のとおり、学校では100冊・1カ月を上限として、教師に本を持っていってもらい、クラスの学級文庫にして、朝の読書活動等で活用いただいている制度のことである。

(委員長) 民間と学校は枠が別なのか。

(小野係長) 民間と学校では分けていなくて、あくまでも市内の団体としてとらえている。

(益田委員) 残りの25%というのは小学校が多いのか、中学校が多いのか。

(小野係長) 現状は、小学校は25校中20校が登録、中学校は7校が登録している。

(大塚委員) 私は図書ボランティアをやっている。本を読む児童生徒の割合が増えているのはありがたいが、中学生の学校図書館の利用頻度が減っているのは、中学校の学校図書館の開館時間が少ないからではないか。前に見学に行ったときに、担当の先生が「連携の前に、まずは学校図書館をもっと開けたい」と言っていた。

(小野係長) 昨年度、小中学校の先生にアンケートをとった。中学校の図書室の開館時間が小学校に比べるとかなり短く、1日平均で1時間開けていない。小学校では1日平均で5時間開けている。それが、利用が少ない要因になっているのではないかという認識だった。

(委員長) あとは、興味が他にあるとか、学校図書館以外で本を利用しているのかもわからないが、子ども読書推進ということにおいては、中学校の開館時間の問題も大きいのではないかと感じた。

(松下委員) 責任を感じながら状況をお聞きした。私は中学校の国語の教員をずっとやってきて、ここ数年は小学校の校長なので、両方の状況は肌で感じている。教育委員会にも携わっていたので調査の性質や必要性もわかっているつもり。調査対象の子どもたちが変わってきているので割合を正確に比較できないが、具体的には、ここ十数年、小中学校で朝読書をするようになった。中学校は、小学校に比べて

元気がいいから、1時間目に入るのに落ち着いた精神状態になるように読書を活用してきたという印象がある。小学校は、子どもたちに本を読むことを習慣づけようという意図が強いように感じる。ここ数年で子供達が情報を仕入れるメディアが変わってきているし、以前は携帯電話を持っている小学生はほとんどいなかったが、今では小学校高学年は結構持っている。それも携帯ではなくてスマホを持っているので機能も全然違うと思う。スマホで読める書籍もある。紙の本を読ませたいのか、電子データや通信ではだめなのか、そういう混沌としている部分もあると思う。毎年行われている国の調査、3年ごとに行われている OECD の調査でも、日本の子どもたちはテレビ、ビデオ、ゲーム、スマホを扱う時間が世界一である。学習指導要領にも「情報教育にどんどん取り組みなさい」とあるから、あまり否定的にもとらえられないし、そこには SNS の問題とか児童生徒指導上の人間関係の問題もあって、子どもたちが良くも悪くもそれに時間をとられて、紙の本を読む機会が時間的には減っていくのは仕方ないかもしれないと感じる。国語の授業もだいぶ変わってきて、「本の紹介、ポップを書こう」「本の帯を作ってみよう」など、図画工作、美術とクロスカリキュラム的にやっていくことで本に親しむとか、そこにも読書活動の推進が関わっているのかなと思う。図書室も、学校司書やボランティアの方の活動のおかげで「本のたまり場」から「見やすい、使いやすい、居やすい」図書環境が変わってきた。子どもたちが興味を持って行きやすい学校図書館になってきているかなと思う。長い期間をかけていろいろ工夫をして変えてきても、子どもの状況もまた変わっていくのでおいかけてこの感はあるが、単に活字離れ、本離れと言われているけれど、子どもたちは情報や読むことからうんとかけ離れてはいないと私は思っている。国語の教科は「話す・聞く・読む・書く」があつて、「読む」の中には必ずどの学年にも、「読書活動につなげていく」という国語教育の順番があるので、読書活動というのを国語科が中心に展開していかなければならないと思っている。

(委員長) 学校教育の現場の状況が大きく変わったというのはみなさん感じていらっしゃると思う。乳児の読書の減少にブックスタートが関わっているというのが、次の章に進むときの大きなステップであり、大いに考えていただきたいと思った。学校は国の司書教諭制度などがあるが、私立の幼稚園・保育所は専任スタッフがいなかったため、図書館がこれからどういう風に関わっていくか、今まで関わってきたか、具体的に効果も見えにくいという現象を感じた。資料中の「連携が不可欠になっている」という言葉には「今までやってきたか」という反省も入るのかと個人的に理解してい

る。そういうことも今後取り組む中で忘れてほしくないところかと思う。具体的にどうするかも考えていかなければならないと思った。

「学校図書館図書標準を充足している小中学校の割合が努力目標に達していない」とあるが、いつ頃決められたものがずっと充足標準になっているのか。

(小野係長) 平成5年3月に当時の文部省が学級数に応じた蔵書の標準冊数を定めたものである。

(委員長) 目標値を100%としていたが、55.6%にとどまったという結果になっている。私もボランティア活動をしていたとき、古い本をずいぶん廃棄したが、そのころの充足数はどこまでだったか、関知していなかった。

## <第二章>

(松本委員) 「6 推進体制」についてだが、図書館が中心となって計画を推進するときに、いろいろな課と連携して事業を行っていくと思うが、どこが担当なのかを明確にした方が良くと思う。

(館長) 図書館が推進の直接の担当だが、事業自体は生涯学習課、子育て政策課、教育指導課も含め様々な課で実施している。各課がどのような事業をやっているか調査を行い、毎年状況を把握しながら必要に応じて呼びかけていく役割を図書館が担っていく。

(松本委員) 私の関わっている東京都多摩市では、こういった体系図を作っていて、それぞれの施策をどこが担当して責任を持つかというのを明示している。そうすると計画の実効性が上がるのかなと思う。

(委員長) その辺の取り計らいをお願いしたいということであるか。

(館長) アクションプランのようなものかと思うが、実際には調査を通した中で事業と担当課、というような結びつきを持っているところだが、なかなか計画が多く、非常に多岐にわたっているので、あまり個別の事業を図書館側が規定するということは今までやってきていないところである。

(委員長) 小田原の場合、ブックスタートがうまくいかなかった大きな原因は、担当部署が



はっきりしていなかったということを私は非常に感じた。私は福祉健康部と図書館と両方から声がかかったが、行政の姿勢がよくわからなくて、手いっぱいでの積極的な協力はできずに終わった苦い思いがある。今、反省と同時にしっかり明示して、図書館もこの範囲では協力するし、責任もって予算を計上していただかないと、TRYプランに方針を書いたとしても事業化するのが難しい。ぜひ今のご意見、明示していただきたいと思う。

(益田委員) “「おだわらTRYプラン」や「小田原市学校教育振興基本計画」との整合に努め”と書いてあるが、もうすでにこの計画自体は整合したかというのを聞きたい。

(館長) そのとおりである。検討する際にそちらを踏まえて、内容を作ってきた。おだわらTRYプランはちょうど見直しの年で、来年度から後期計画が始まるのでスタートが一緒になるが、その訂正作業と合わせながら作ってきた。

(勝又委員) 「団体登録率100%を目指す」としているが、そのあとやり取りが発生しなければあまり登録の意味がない。実施率はどの程度か。

(館長) 実際に活用を促すことが重要だというのはおっしゃる通りだと思うが、まず登録がないことには制度の周知が足りないのかもしれないので、変更せず、第一期との比較ができるようにしている。

(委員長) 制度の周知についてはどうか。幼稚園・保育所は14%という結果が出ているが、団体を通して周知しているのか。

(館長) 前々期の図書館協議会でも学校図書館との連携というのを議題にあげていただいたし、折に触れPRに努めているが、まだ十分浸透していないのかなとも思う。

(大塚委員) 「団体登録をしませんか」と、図書館側から幼稚園・保育園にアプローチしているのか。

(館長) 文書で一斉に通知したというのは、近年はない。

(大塚委員) 「団体登録をするとこんないいことあるからいかがですか」というアプローチがあると進展するかと思い、質問したところである。

(館長) 検討したいと思う。

(委員長) 松下委員に尋ねるが、学校図書館協議会の中で団体登録の話は出てきているのか。研修の段階で、司書教諭たちは、そういう制度は当然ご存知ということで扱っているのか。

(松下委員) 団体登録については、聞いていない。勝又委員からもあったように、活用していくとなると、いろいろまた課題が出てくる。だが、まずは登録からだと思う。本校も確かめてみたい。

(委員長) 「こういうときにこういうメリットがあった」という事例を紹介しながら、学校図書館協議会の中とか、ボランティア学校司書の研修でアピールするための筋道を図書館がつけていただけると嬉しい。このデータからは大きな課題を感じた。

(深田委員) 学校図書館にはあまり蔵書がないから、生徒・児童が OPAC で市の図書館の本を予約して、自分の通っている学校でその本を受け取ることができるシステムが構築されたら本が借りやすくなるのではないかと。団体登録をされている学校や学校司書がいる学校でそういうことができたらいいと思うが、やはり負担は大きいものなのか。

(館長) 現在、ネットワーク館と自動車文庫で回っているが、予約してすぐ届くという物流システムを作るにはかなり大きな財政負担が伴うと思う。学校図書館の団体登録が伸びない原因の一つにも、登録はできても自分で取りにいかないといけないということはあるように感じている。財政負担を伴うものなので簡単に約束できるものではないが、おっしゃる通り効果が高いと思うので検討していきたい。

(委員長) 方法に関してはいろいろな解決策は出てくると思うので、ぜひ考慮していただきたい。

### <第三章>

(松本委員) 「家読の推進」はどこが担当するのか、「ブックリストの作成」はどれくらいの頻度で作っていくのか等具体的な記述があった方が計画の内容が市民に分かりやすくなると思うし、担当者の引き継ぎのためにも具体的にした方がいい。

読書通帳の要望がアンケートでもあったと思うし、子どもの読書が促進されるので考えていただきたい。三鷹図書館では読書通帳代わりにアプリで自分が読んだ本を管理できるシステムがあって、たいしてお金がかからなかったと思う。機械を入れるのは大変なので、できたらいいなというのがひとつ。また三鷹市で、日本動物病院協会の協力で、読書介助犬に対して子どもがお話をする「わん！だふる読書体験」というイベントをやったと聞いた。子どもが声を出して読むのはなかなか勇気がいることだが、犬に対してなので安心して読める。そんなイベントもいいかなと思う。多摩市では「子ども読書まつり《ほんともフェスタ》」という読書関連のイベントをやっていて、読み聞かせ、紙芝居、手遊び、外国人が外国語で読む絵本の読み聞かせ、落語の体験、市内で読書活動をやっている団体の活動紹介等いろんな会場を使って1カ月くらいやる。読書の重要性を喚起する一つの機会としてそういったイベントもいいと思った。「学校図書館の充実(14ページ)」に関連して、学校司書の配置をもっと充実させていただきたい。「心に残る本と出会えるように、良書を推薦していく(15ページ)」とあるが、読書活動の推進というのは、いい本を私たちが決めて「これを読め」ってことじゃなくて、子どもたちが自分で本を選んで楽しめるよう支援することだと思うので、「心に残る本と出会えるように、それぞれに合った図書を推薦していく」に代えたらいかがか。

(委員長) 「学校図書館でデータベース化を図っていく」とあるが、実際に「進める」という担当は図書館とは別か。

(館長) データベース化は着実に実行していただいている。データベース化完了後の活用等について、図書館も一緒に話に入りながら、次の段階としてやっていく。

(委員長) 司書が替わったときの引き継ぎの問題や、今年は市議会でも議論をしていたが、委託先が変わって引き継ぎがうまくいっていないという話が耳に入ってきた。また、「データベースはまったく活用できる状態にない」と話す現場の方もいる。図書ボランティアの立場からすると、新しく赴任された学校司書がデータにタッチしているかが疑問である。図書室ではパソコンは触れない状態になっているので、どこで

誰が作業しているのか分からない。ぜひ具体的に「どこの部署が、誰が、どういう形のものが利用できるよになればいいか」というところまで踏み込んだ協議ができればいいと思う。データベース化により図書館と連携して検索できる、相互に貸し出し可能になる、などいろんなビジョンがあると思う。「例えばこういうことができるようになるよ」ということがあってもいい。図書館サイドとして充実できることに取り組んでいただくようお願いしたい。

(益田委員) 読書を楽しんでこなかった世代が保護者になっている。ブックスタートは、絵本を手にとったことがない保護者にも本がまんべんなくいきわたっていたので、良かったと思う。私は仕事で「こんにちは赤ちゃん訪問員」をしていて、生まれた赤ちゃんの家を全戸訪問する際、図書館のチラシも渡している。読み聞かせの日時の文字が小さくて見づらいので、わかりやすいチラシに変えたらもっとお母さんにアピールができると思う。お母さん方が本に触れる機会を増やしてあげた方がいいと思う。

(館長) 今、益田委員がおっしゃったようなご意見を、連携を強化することで、徐々に推進していきたいと思う。小田原駅前の新たな図書施設には、保護者とお子さんと一緒に来てほしいので、子どもの本を並べるだけでなく、子連れで来た人が楽しめるようなコーナーも特出しで展示をしようかと検討している。家族が本を読む姿を見せるということ、手元に本がある環境を作っていくことが大切だと思っている。

(委員長) 「パパ絵本読み聞かせマスター講座」がはじめての一步になるといいと思う。「家読の推進」が若いお母さんたちにピンとくるかどうか。工夫が必要だと思う。

(勝又委員) 先日見たNHKの“噂の保護者会”という番組では「高学年になっても読み聞かせをしよう」「司書になんでも相談しよう」「読書の後で自分の言葉で感想を述べたり書いたりすると、その子の成長とか学力につながっていく」と言っていた。子どもは読書感想文を書きたがらないが、読んだ後に自分の言葉で書くという課題を与えるのは良いことだと思う。

(委員長) 葉っぱを配って、読んだ本と感想をちょっと書かせて木に貼るということに取り組んでいるところがある。

(勝又委員) うちの小学校でもやっている。

(館長) 私どもも、目標を「伝える」とし、目指す子供の姿に「伝えられる」というのを入  
れていて、OECD の読解力の話でも「ただ読み取るだけでなく、読み取ったものを咀嚼  
して伝えることが必要だ」と言われているので、そういう事業を増やしていきたい。  
読書週間にかもめ図書館で「読書の木」に葉を貼ったり、20周年記念の時に「おす  
すめの本」を応募いただいたり、インターンの生徒さんに報告を書いていただいたり、  
もうちょっと大きく見えるような動きもしていきたいと思う。

(大塚委員) 読書通帳はどこでやっているのか。通帳の後ろの方に大好きだった本の感想を  
書いて残すと、何冊にもなったらうれしいだろうし、小学生にはとてもいいと思  
った。また、別の部署のイベントに関連の本を持って出向くとか、子どものイベ  
ントに図書館の楽しさを紹介するブースを置いたらいいと思う。

(松本委員) 読書通帳は三鷹でやっている。私もさっそくスマートホンのアプリをダウンロ  
ードしたが、登録者じゃないとログインできないのでどういものかはわからない。

(委員長) 私が視察で広島 of 図書館に行ったとき、通帳を希望者に配っていた。その後の管  
理をどうしているかはお聞きできなかった。一般家庭で保護者がきちんと管理すれ  
ばいいが、高学年の子どもしか自己管理はできないので、学校図書館で取り組む方  
がいいのかなと私は思った。小田原では読書通帳をやっているところは聞いたこと  
がない。そういった連携プレーと推進のための施策を図書館側も応援する、という  
姿勢をはっきり表してほしい。「地域のボランティアグループを支援し、人材を育  
成していく必要もあります。」を「地域の～～育成していきます。」という表現に  
してほしい。ボランティア歴40年を超えたが、そこでいかに自分が学び、前進す  
るかということは毎日の努力がないと無理だということを如実に体験している。ボ  
ランティアをやりたいけど行き詰まっちゃうという人が沢山いると思う。今後、地  
域や学校図書 of ボランティア育成に対して、図書館と学校図書館協議会で連携しな  
がらぜひ具体化してほしい。毎年、年に何回か育成講座をやってレベルアップを図  
ることに取り組んでもらいたいというのは私の長年の願いである。

(松下委員) 「小田原が登場する作品(15ページ)」に関連して、8・9年前に学校教育課  
が、だいぶ予算と期間をかけてまさにこういった本や地図を30冊くらい集めて、

ラックに入れて、全小中学校に配った。職員室や校長室などで活用されずに眠っている。「学校教育課がこういうことを過去にやっているはずだ」と教育指導課にも連絡を取っていただくと良いと思う。学校教育の柱の一つである郷土学習として、学校運営にも関わってくるところだから「学校に戻ったら見てもらいたい」ということを言っていただくといいと思う。

(委員長) 職員用の資料として別置されている学校が多いと思う。職員室や資料室などにあるから、一般の人達が見られない。ぜひやんわりとご指導いただければと思う。ブックスタートについては17ページに書くのかどうか、議論してもいいと思う。「学校・幼稚園・保育所における子ども読書活動の推進と連携」の中で乳幼児の読書活動の支援として、ブックスタートは欠かせない物じゃないかというのが私たち市民としての感覚である。図書館側としても具体的に取り組んでいただけたら嬉しいと思っている。

(館長) 「乳児と保護者への啓発事業」という項目を載せている。ブックスタートを再開できるかどうかについては、過去に実施していたものをやめたという経緯の中で、どこまでできるかは検討の余地がある。

(委員長) 大変だとは思う。ブックスタートがなくなったことに関して保護者がアンケートにかなり書いていた。その辺りは機会ある所でまたテーマとしていただくとありがたい。

#### (8) その他

(委員長) その他について、事務局から何かあるか。

(杉崎副館長) 次回の開催については、改めて日程調整させていただきたい。来年1月頃の開催を予定している。また、図書館関連の各種行事のチラシなどを配付させていただいたので、ぜひご覧いただきたい。

(委員長) 了解した。それでは、本日は、ここまでとする。

終了